

海外取材

ルッカのテアトロ・ジージオで喝采を浴びるチェチーリア・バルトリ

Cecilia Bartoli meets Maria Malibran in Lucca

# チェチーリア・バルトリ

## プッチーニの生地、イタリア・ルッカで19世紀の大歌手、マリア・マリブランと“共演”!

取材・文=中 東生  
Text=Shinobu Naka



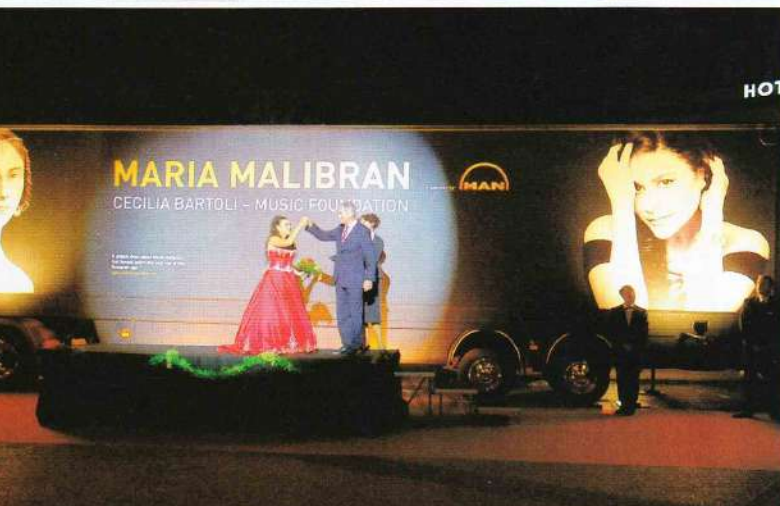
プッチーニの生地、イタリアのルッカで、いまを時めくディーヴァ、チェチーリア・バルトリが、来年生誕200年を迎える19世紀の大歌手、マリア・マリブランと“共演”! 2人を乗せた移動美術館(?)も出現し、ルッカの街にはバルトリ旋風が吹き荒れた。マリブラン自身も2度そのステージに立ったというルッカのテアトロ・ジージオでのコンサートは、か、イヴェントも開催。コンサート翌日のインタヴューにバルトリは、マリブランの遺品のアクセサリーを身に付けて現われた。

### 黒い大型トラック「移動美術館」も登場

プッチーニの生地として知られている静かな街、ルッカに黒い大型トラックが姿を現した。そこには2人の女性像が描かれていた。19世紀のミューズ、マリア・マリブランと21世紀のスター、チェチーリア・バルトリ。それはマリブランの生誕200年を記念して、バルトリが実現させた「移動美術館」だったのである。バルトリ待望のニューディスクは、マリブランの「マリア」と名付けられ、9月10日には、マリブランも2回のセッションを歌ったゆかりのテアトロ・ジージオでオープニングコンサート、劇場前広場でオープニング・セレモニーが催された。

いつものようにはちぎれんばかりの「幸せオーラ」を振りまくバルトリは、日焼けした肌を、プリリアントがたくさんちりばめられた真紅のドレスで包み、腕にはマリブランの遺品のブレスレットが輝いていた。バルトリとの共演でおなじみの古楽器オーケストラ、シンテツラが奏でた1曲目は、音程も不安定でリズムもたどたどしかったが、それは、現代の楽

コンサートが行われたテアトロ・ジージオ前の広場に現われた巨大なトラックの前には多くのファンが集まった。その歓声に応えるバルトリ(9月10日)



器で奏でられるベルカントオペラに慣れてしまっている私の耳のせいらしい。コンサートが進むにつれ、耳が研ぎすまされ、その繊細な音色の編み物の中に引き込まれていった。珠玉の1曲はベルシアー二作曲の《イネス・デ・カストロ》の Aria (カリー・ジョルニ)。バルトリはコンサートの2、3曲目によくこのような卵が光る、内なる叫びのような曲を置くが、今回もその効果は絶大で、コロラトゥーラに驚喜した観衆を、すぐに内面世界に引き戻した。その後のメンデルスゾーンは、オーケストラの本領発揮で、素晴らしい出来だった。バルトリの声は、CDで聴くと気付かないが、ライブだと、

とくに後半の表現力がとてもドラマティックなのに、音量がつかないからいがあると思われするのは、現代の耳で聴くからだろうか。最後は彼女の18番《チエネレントラ》の、彼女にしてはビックリするくらいの「f」で締めくくると、大きな拍手に劇場中が包まれた。その後のセレモニーでは、伊、英、仏、西の4か国語で感謝を述べ、素敵な庭園内でのデイナーでも、彼女はすっとパワフルなままであった。

そして翌日、例の「移動美術館」で、マリブラン手製の刺繍が収められたガラス・テーブルに座りインタヴューに応じてくれた。

バルトリとマリブランを掲げた巨大なトラックがルッカの街のみならず、ヨーロッパ中を巡った!



## インタビュー Cecilia Bartoli meets Maria Malibran in Lucca

マリブランを知って初めて、「ディーヴァとは何か」が理解できたような気がします。何をやっても天才的で神懸かり的な彼女こそ、本当のディーヴァだと思います。

取材・文=中東生  
Text=Shinobu Naka

マリブランの生誕200年に向け、彼女に捧げる「マリア」というCDを作ることにしました。

——昨日のコンサートはとても素晴らしかったです。いつ頃から、そして何故、マリブランにちなんだこのような企画を考えたのですか。

バルトリ（以下、B） もうずいぶん前から、私は音楽家の手紙や所持品を収集するのが好きでしたが、決定的な出来事は、20年ほど前、ローマで《セビリヤの理髪師》にデビューした時、今回のレコーディング・ディレクターが「マリブランはロンドンでこのオペラを初めて歌った。今度は君の番だ。これが君に、彼女と同じような幸運をもたらしてくれるように」と、マリブランの肖像画をくれたことでした。その姿はとても美しく、いっぺんに好きになってしまいました。そのうち、15年程前でしょうか、マリブランの所持品がコレクションに入ってくるようになりました。最初はマリブランの手紙でその次は腕輪、そしてロッシーニからの手紙などが手に入り、それらを研究しているうちに、どんどんマリブランに興味が高まってきたのです。両親が歌手であったり、若いうちに渡米していたりなどと、私と彼女にはたくさんの共通点があることが分かり、音楽的にも、メゾソプラノという声域やレパートリーなどが同じでした。他にもジュディッタ・パスタ、ジュリエッタ・コルブランなど、ロマン主義の時代のディーヴァを通して、その時代に思いを馳せるようになりました。そして、アメリカ、フランス、ドイツなど世界中の収集家を訪ねては、交換

などをして、コレクションを増やしてきました。

それ以前にすでに、ずっとベルカントに戻ってみたいとは思っていましたが、今はソプラノが歌っているベルカントのレパートリーを、当時のようにメゾソプラノの暗い響きで、当時の楽器で、マリブランの声についての描写などを通して再現してみたくなりました。こうして、マリブランの生誕200年記念に彼女に捧げる「マリア」というCDを作るに至りました。現代の楽器で演奏されるベルカントは二次元的ですが、オリジナルの楽器を使うと、独特の透明感が出て、強弱の可能性もずっと広がり、オーケストラと歌い手の間に会話が生まれるようなのです。

それと同時に、私の収集品も家にしまっておくのはもったいなく、普通の美術館だと特定の人にしか見てもらえないので、移動式を考え、スポンサーを探してやっと実現しました。人々がコンサートに来てくれる時、マリブランの身の回りの物に囲まれて、その空間を休感してもらいたいです。

——マリブランを身近に感じますか。

B 歌手であり、女優であり、作曲家、ハープ奏者、ピアニスト、ギタリスト、刺繍の腕前でも一種のアーティストである、芸術家としての彼女を身近に感じる反面、大きな憧憬も感じています。マリブランを知って初めて、ディーヴァとはなんたるものが理解できたような気がします。何をさせても天才的で神懸かり





という彼女こそ、本当のディーヴァだと思えます。

特に《夢遊病の女》のARIA冒頭部を聴くと、CDタイトルの「マリア」と相まって、カラスを彷彿とさせますが、B カラスは長い間演奏されずに埋もれていたベルカントオペラを発掘し、彼女の声をメゾソプラノの音色に修正して、それらをオリジナルに近い条件で歌ったのです。私はその功績を受け継いで、真のメゾの声で、当時の楽器で再現したかったです。

このCDを作り上げるために、私は作曲家自筆の譜面を研究しました。例えば

《ノルマ》のARIAの強弱は、*p*、*pp*、ソットヴォーチェで、内面の力呼び覚まそうとする、極めて内面的な祈りなので、今までのディーヴァたちに歌われてきたような英雄的なARIAとは異なるものなのです。それは、当時の楽器と演奏してこそ、実現できるものでしょう。例えば導入部のフルートは木製です。だからこそ、独特の甘さ、親密さ、神聖さを表現できるのです。

### 《クラリ》はマリブランのために書かれましたから……

——アルバム収録曲のアレヴィの《クラ

リ》は今シーズン、チューリヒ歌劇場で歌われますが、やはりバルトリさんの方から提案したのですね。

B アレヴィは、このオペラをマリブランのために書きましたから、生誕200年記念に、埋もれてしまったこの作品を復活させたかったのです。彼の代表作《ユダヤの女》とはまったく違った趣向で、ロッシニやベッリーニ流の軽やかでコミカルなベルカント風オペラです。

### ——今後の予定は？

B しばらくはこのコンサートツアーが続きます。そして、2008年3月24日、マリブラン200歳記念の日はパリです

——ごい企画があります！ 朝は、今回のCDの特別ゲストでもあるヴェンゲーロフとラン・ランと3人で、当時風のサロンコンサート、昼は《チェネレントラ》、夜はマエストロ・チョンとコンサートをするという、殺人的なスケジュールです。オペラは、例の《クラリ》の他に、2008年にバーデン・バーデンで《夢遊病の女》を演じる予定です。全曲録音はすでにフローレスと体験済みで、半年もすれば売り出されると思います。

日本には、来年の10、11月に戻るともります。昨年春の日本公演の時には、あまり長くご無沙汰していたからでしょうが、日本のウィルスに対する免疫がなくなっていたのか、熱を出してしまいましたから（笑）。プログラムはまだ決まっていますが、オーケストラと共演できるなら、このツアー・プログラムを持つて行ってもいいし、スポンサーが見つかれば、移動美術館も連れて行けます。名乗り出ただけの方は、「音楽の友」の編集部までご一報下さい（笑）。



©Uli Weber/Decca

チェーリア・バルトリの最新CD「マリア」[UM UCCD1194]は11月21日発売（DVDがプラスされた限定盤も同時発売）。パチーニ《イレーネ》〜《もし私の願いを……この嘆きに折れてください》、メンデルスゾーン「声とヴァイオリン、オーケストラのため



MARIA CECILIA BARTOLI

のシェーナとARIA《不幸な女よ》ほか、マリア・マリブランが得意としたレパートリーが収録されている。（共演）マキシム・ヴェンゲーロフ（vn）、アダム・フィッシャー指揮チューリヒ歌劇場「ラ・シンティラ」オーケストラ、チェルソ・アルベロ（T）、ルカ・ピサロニ（Bs-Br）他